

嫁入り支度

ПРИДАНОЕ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

わたしは生涯に、たくさんの家を見てきた。大きいのも小さいのも、石造のも木造のも、古いのも新しいのも。がそのなかで、ある家のことが特にわたしの記憶に焼きついている。

もつともそれは、家というより、まあ小屋に近い。ちつぽけで、平家建てで、窓が三つついていて、まるで頭巾ずきんをかぶったセムシひらやの小さな婆さんそっくりだった。外廻りそとまわは白い漆喰しっくい喰ぬりで、瓦かわらぶきの屋根に剥はげつちよろけの煙突を立てているその家は、現在の主人の祖父や曾祖父が植えこんだ桑やアカシヤやポプラの緑のなかに、すつぽり埋まっていた。緑にかくれて、その家は見えない。とはいえ、うっそうたる緑に包まれているからといって、

この家はやはり市街地の家に違いなかった。その家の広々した宅地は、おなじく広々した隣家の宅地と一列に並びあつていて、モスクワ通りの一部をなしていたのである。この通りを馬車で行く人はなく、通行人もたまにしかなかった。

その家のよろいど鎧戸は、いつも閉まつている。住み手が光を欲しがらないからである。彼らには光がいらぬのだ。窓にしても、ついで開かれたためしがない。住み手が新鮮な空気を好まないからである。しよつちゆう、桑やアカシヤやゴボウの繁みのなかで暮らしている人びとには、自然なんかどうでもいいのだ。自然の美を味わう能力は、別荘へやつてくる人たちにだけ与えられたもので、ほかの連中ときたら、そんな美があるのやらないのやら、て

んで知りもせずに暮らしているわけだ。自分がどっさり持っているものは、一向ありがたくないのが人間の常である。俗に「手にあるうちは大事でない」というが、それどころか、手にあるものは可愛くない、ではないか。その小さな家のぐるりは、まさに地上の楽園で、緑は深く、鳥が楽しげに啼なきかわしているが、ひと足その家へはいつてみれば、——ああ、なんたることか！ 夏はむんむんして息ぐるしいし、冬はまた冬で、まるで蒸し風呂のよくな暑さ、それに炭の気がたちこめて、わびしく味気ない……。

はじめて私がこの家を訪ねたのは、もうだいぶ前のことで、ちよつと用があつたからだ。というのには、その家の主人であるチカマーソフ大佐から、その夫人や令嬢に宜よろしく伝えてくれと頼まれ

たのである。この最初の訪問のことを、わたしは実によく覚えて
いる。忘れろと言われても忘れられないのだ。

まあ考えてもごらんなさい。小柄でぶくぶくした四十がらみの
婦人が、怖れおそと驚きをつきまぜたような顔つきで、控室から広間
へはいつてゆくこつちの顔をまじまじと見つめる。こつちは「よ
そ者」であり、お客であり、おまけに「若もの」と来ている。そ
れだけでもう、相手を驚きと怖れの淵ふちへ突きおとすには十分な
だ。こつちはクサリ鎌も、斧おのも、ピストルも、何ひとつ兇器きようきを
もっているわけではないし、愛想わらいをまで浮かべているのだ
が、それでもやはり強盗あつかいにされるのだ。

「あの、失礼でございますが、どなた様で？」と顫ふるえ声こゑで、その

年配の婦人はたずねる。そこで、ハハアこれが当のチカマーソフ夫人だなと見当がつく。

こっちは名を名のつて、来訪したわけを述べる。すると、怖れと驚きの表情に入れ代つて、こんどはつんざくような「まあ！」という歓声がほとぼしり、眼がくるくると廻りだす。その「まあ」が、まるで木魂こだまのように、控室から広間へ、広間から客間へ、客間から台所へ……あげくのはては穴倉へまで、つたわつてゆく。まもなく家じゆうが、さまざまな音色の「まあ」という歓声でいっぱいになる。ものの五分もすると、こっちは客間のふかふかした、かつかと熱い大きなソファーにかけて、今やモスクワ通りが上から下まで、「まあ」という歓声を発しているのを耳にするのだ。

虫よけの粉と、新しい羊皮の靴のおいがしていた。靴のほうは風呂敷にくるんで、わたしのそばの椅子いすにのせてあった。窓にはゼラニウムの鉢植えと、モスリンのぼろ布。そのぼろ布には、満足した数匹の蠅はえ。壁には誰か僧正の肖像がかかっていて、油絵のくせにガラスがはめてあり、そのガラスの一隅が欠けている。僧正につづいて、先祖代々の肖像がならべてあるが、どれもこれもレモンみたいに黄ばんだ、ジプシーふうの人相をしている。テーブルの上には指ぬきが一つ、糸まきが一つ、それに編みかけの長靴下が載っており、ゆかには型紙だの、まだ仮縫いの糸のついている黒い女の上衣うわぎが落ちていす。隣の部屋では、ふたりの婆さんチャコが大あわてのていで、せかせかと型紙や白墨のかけらを、ゆか

から拾っている。……

「どうも大そう取り散らかしておりました！」と、チカマーソフ夫人が言った。

チカマーソフ夫人は、わたしの相手をつとめながら、ちよいちよい当惑そうな横眼で、まだ型紙の片づけの済まない隣の部屋のドアをぬすみ見た。そのドアも、やはり当惑したように、一、二寸あいては、また閉まったりした。

「あの、何の御用なの？」と、チカマーソフ夫人は、そのドアへ声をかけた。

「わたしの襟飾りはどこですの、お父様がクールスクから送つてく
エ・ド・クールスク
ウ・エ・モン・クラヴァート
ルケル・モン・ペール・マヴェ・タンヴァアイ
くだすつたの？」と、ドアごしに女の小さな声がきく。

「まあ《アー》、お前エ・ス・ク・マリイ・クだつたの、マリイ……。ほんとに、なんてことを……。だヌー・ザヴォン・ドンク・シエ・ヌー・アン・ノム・トレ・プー・コニユ・つて、はじめてのお客さまが見えてらつしやるのパル・ヌーですよ。……ルケーリヤにきいてごらん。……」

『でもわたしたち、フランス語がなんて上手でしょう！』満足に顔を赤らませたチカマーソフ夫人の眼のなかに、わたしはそう読みたつた。

ほどなくドアがあいて、背の高い、やせた少女の姿が見えた。

年は十九くらい、モスリンの長い服をきて、金色のベルトをしていたが、そのベルトには忘れもしない、青貝細工の扇がさがつていた。娘ははいつて来て、席につくなり、ぽつと赤くなった。赤くなったのはまず、彼女の長い、幾分あばたのある鼻で、その鼻

から眼もとへ、眼のまわりの米噛みへと、その赤がうつった。

「娘でございます！」と、チカマーソフ夫人が歌うように言った。

——「そして、マーネチカ、このお若いかたはね……」

わたしは挨拶をすますと、型紙がどっさりおありなものには驚きましたと、正直に言った。母親と娘は眼をふせた。

「こちらでは、昇天節に市が立ちましたの」と母親が言った。――

――「市が立つと、いつも私どもは布地をたんと買いこみましてね、また次の市までまる一年のあいだ、せつせと服を縫いますの。縫物は一さい外へは出さないことになっております。宅のピョートル・ステパーヌイチは、格別たいして頂戴しているわけでもありませんので、わたくしども贅沢はできませんの。縫物なども、じ

ぶんで致さなくてはねえ。」

「でも、こんなにくさん、一体どなたがお召しになるんです？ おふたりだけではないですか。」

「まあ……こんなにくさん着られるものですか？ これは着るのではありません！ これは、嫁入り支度ですよ！」

「あら、ママったら、なんてことを？」と娘は言つて、赤くなつた。——「ご存じない方は、ほんとになさるじやありませんか。

……わたし、お嫁になんか行きませんか！ とんでもない！」

そう言つたが、その「お嫁」という言葉のところで、眼がきらきら燃えた。

お茶とビスケットと、ジャムとバターが出て、そのあとでまた、

クリームのかかった^{いちじ}苺が出た。夜の七時には、六皿から成る夜食が出たが、その夜食のさいちゆうに、私はふと大きなあくびを耳にした。誰かが隣の部屋で、大あくびをしたのである。わたしはびっくりして、ドアを見やった。そんなあくびは、男でなければできない。

「あれは宅の弟の、エゴール・セミヨーヌイチですの……」と、わたしの驚きを見てとって、チカマーソフ夫人が説明した。――
「昨年からわたくしどものところで暮らしておりますの。どうぞ悪^あしからずね、お客様の前へは出られない人ですから。とても変屈な人でして……人様の前へ出ますと、すっかりあがつてしまいますの。……修道院へはいると申していますけれど。……お役所

づとめのあいだに、いじめ抜かれて、頭がどうかしたのですわ。

……それでもう、やけになつて……」

夜食がすんでからチカマーソフ夫人は、坊さんの肩帯を見せてくれた。それはエゴール・セミヨーンイチが手ずから刺ししゅう繡していたもので、いづれ教会へ寄進することになっていた。マーネチカは、一瞬間その内気さを捨てて、パパへの贈物に自分で刺繡していたタバコ袋を見せてくれた。わたしが、彼女の手なみにさも感服したような顔を見ると、彼女はまた赤くなって、何やら母親の耳へささやいた。母親もぱつと顔を輝かせて、わたしを納戸なんどへ案内しようと言いだした。納戸へ行つて見ると、大きなトランクが五つほどと、それに小さいトランクや箱がどっさりあった。

「これ……嫁入り支度ですよ！」と、母親はわたしにささやいた。
——「みんな、うちで縫いましたのよ。」

その陰気なトランクの山を、ちよつと眺めて、わたしは愛想のいい女主人たちに別れを告げはじめた。またいつか訪ねてくるように、ふたりはわたしに約束させた。

その約束を、はからずも私がはたすことになったのは、最初の訪問から七年ほどして、さる訴訟事件の鑑定人の役目で、この小さな町へ出張を命ぜられた時であった。覚えのある小さな家へ立ち寄るなり、わたしが耳にしたのは、あの同じ「まあ」という声だった。……顔を忘れずにいてくれたのだ。……思えば当然だ！

わたしの最初の訪問は、かれらの生涯には大事件だったし、そ

れにいやしくも事件となると、それが滅多めったに起こらない場所では、永く記憶されるからである。わたしが客間へはいつてみると、この前よりもっと太って、もう白髪あたまになった母親は、ゆかに這はいつくばって、何やら青い布地を裁たっていた。娘はソファーにかけて、刺繍をしていた。やはり散らばっている型紙、あい変らずの虫よけ粉の臭いにお、すみつこの欠けた例の肖像画。とはいえ変化は、やはりあったのだ。僧正の肖像の横に、ピョートル・セミヨーンヌイチの肖像がかけてあって、母も娘も喪服をきていた。ピョートル・セミヨーンヌイチは、将官になって一週間目に死んだのである。

思い出ばなしが始まった。……将官夫人は、わっと泣きだした。

「わたくしども、大そう悲しいことがありますのよ！」と彼女は言つた。——「ピョートル・セミヨーンヌイチは——御承知ですかしら？——もうおりませんの。わたくしはもう、これとふたりきりですから、自分で自分たちの始末をつけて行かなければなりませんの。もつとも、エゴール・セミヨーンヌイチは生きていますけど、あの人のことでは、いいお話は何ひとつありませんでねえ。

修道院へは入れて頂けませんでした。それと申すのも……あんまり御酒ごしゆを頂くものですから。で今じゃ、なおのこと、やけになつて頂くのですよ。わたくし、貴族団長のところへ伺つて、お願いしてみようと思ひますの。まあ思つても御覧なさいまし、あの人はもう何べんもトランクをあけて……マーネチカの嫁入り支度を

引きずり出しては、巡礼にやっってしまうんですもの。もうトランクが二つ、すっかり空っぽですよ！ この調子で行きましたら、うちのマーネチカは、何一つ嫁入り道具がなくなってしまうわ……」

「あら、ママったら、何をおっしゃるの？」とマーネチカは言つて、顔を赤くした。——「ご存じのないかたは、ひよつと本当になさるかも知れないわ。……わたし、お嫁になんか、決して決して行かなくてよ！」

マーネチカは、さも感に堪^たえぬといったふうで、期待のまなざしを、じつと天井にそそいだ。それで見ると、いま言ったことを信じていないらしかった。

控室のほうに、その時ちらりと見えたのは、小がらな男の姿で、大きく禿はげあがって、焦こげ茶ちやいろのフロツクを着て、長靴の代りにゴム長をはいている。あつと思うまに、鼠ねずみのようにちよろりと消えた。

『あれがエゴール・セミヨーヌイチだな、てつきりそうだ』と、わたしは思った。

わたしは母親と娘を、いつしよに眺めた。ふたりとも、ひどく老ふけて骨ばっていた。母親の頭は銀いろに光っているし、娘もやつれ、しぼんで、母親の年に五つとは違わないように見えた。

「わたくし、貴族団長のところへ伺つて」と老夫人は、さつき話したのも忘れて、またくり返した。——「お願いしてみようと思

いますのよ！　だつてエゴール・セミヨーンイチは、わたくしたちが縫いためるはしから、何もかも持ちだして、後世のためとか申して、どこやらへ寄進してしまうんですもの。そのうち、うちのマーネチカは、何ひとつ嫁入り道具がなくなつてしましますわ！」

マーネチカはぽつと顔を染めたが、もうなんとも言わなかつた。「またすっかり新調しなくてはなりませんわ。でもわたくしども、一体どんなお金持ちでして！　何しろ、親ひとり子ひとりですもの！」

「ほんとに、ふたりきりですわ！」と、マーネチカもくり返した。去年のこと、わたしは運命のみちびきで、その家をまた訪れる

ことになった。客間へ通りながら、ふと見ると、すっかり老いこんだチカマーソフ夫人の姿があつた。彼女は黒い喪服に身をつつみ、白の喪章をつけ、ソファアールにかけて何やら縫物をしていた。それと並んで、小がらな老人が、焦茶色のフロツクに、長靴がわりのゴム長をはいて、坐っていた。わたしを見ると、小がらな老人は飛びあがりざま、客間から駈^かけだして行つた。……

わたしの挨拶にこたえて、老夫人はにつこり笑つて、こう言つた。

「ジユ・スユイ・シャルメ・ド・ヴァー・ルヴオアール・ムツシュまたお目にかかれて、嬉しゆうございますこと、あなた。」

「何を縫つてらつしやるんです？」と、暫^{しばら}くしてわたしはきいた。

「肌着ですの。縫いあがつたら、教父さまのところへ、かくして

頂きに行きますの。さもないとエゴール・セミヨーヌイチが、また持ちだしますものね。わたくしこの頃は、何から何まで教父さまに預かっていたいただきますのよ」と、彼女はひそひそ声で言った。そして、すぐ目の前のテーブルに立ててある娘の肖像に眼をやると、ほっと溜息ためいきをついて、こう言った。

「何しろ、ふたりきりですもの！」

だが、娘はどうしたのだろうか！ あのマーネチカは、どこにいるのだろうか？ わたしは、とうとう尋ねなかった。この深い喪に服している老夫人に、たずねてみる気にはなれなかったのである。そして、わたしがその家に坐っているあいだも、やがて席を立ててからも、マーネチカは出てこなかったし、その声もしなかった

し、彼女の物静かな内気な足おともしなかつた。……あらためて訊^きくまでもない、わたしの心は重かつた。

(Приданое, 1883)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第二卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：小林繁雄

2010年5月24日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嫁入り支度 ПРИДАНОЕ

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>